

イラン伝統音楽の即興概念

——即興モデルと対峙する演奏者の精神と記憶のあり方——

谷 正人

本稿の目的は、客観的にみる所の同じ演奏を「違う」と称したり、異なる演奏を「同じ」と称するイラン人の即興認識がいかなる感覚に基づくのかを明らかにする事にある。即興のモデルとなるダストガーという体系には、音楽家の身体に蓄積される伝統的な旋律型—ストックフレーズと、更にはそれらストックフレーズがいかに配列されるべきかという旋律型同士の関係性の大きく二つの構成要素があるが、本稿ではダストガーの内実よりも演奏者がこのモデルとどう対峙しているのかという彼らの精神や記憶のあり方に焦点をあて以下を指摘した。1) 研究者がストックフレーズをまず実体として捉え、それが即興ではそのまま使われるのか否かという視点に無意識に通じる固定性を見出す(⇒テキスト文化的精神) 一方、イラン人にとってこれらの旋律は音が鳴るその瞬間にのみ存在し、しかもそれはまず旋律間の構造を実現する為にある。旋律そのものに対する逐語的記憶は希薄で実際に演奏によって一つの形が与えられる迄それは「思い出」に近い記憶である(⇒声の文化的精神)。2) テキスト文化に内在する固定性が「それは既に誰かのものであり即興ではそれ以外の何かを弾かねば」という感覚に通じる一方、声の文化に内在するストックフレーズの様な固定性は誰のものでもない共有物であり、借りる感覚さえなく演奏のその瞬間には誰もが自分のものとして使える感覚を備える。3) どんな即興もその度に個人がダストガーから実際の音楽を導き出す手続きを踏む以上、それはその都度演奏者にオリジナルなものとなるという意味で「違う」。一方客観的に異なる二つの演奏は、上記1) 2) の感覚の中では「いずれの演奏もダストガーに基き生み出した」という感覚しか残らず「同じ」となる。即ち実際に生み出された演奏がテキスト的にどうというより、ダストガーからその都度音楽を導き出すという「手続き」こそが彼らにとっての即興なのである。